

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月1日現在

機関番号： 10101
 研究種目： 基盤研究(C)
 研究期間： 2010～2012
 課題番号： 22520120
 研究課題名（和文） 1950年代日本映画と日本文学との相関研究

研究課題名（英文） Studies on Correlation between Japanese Movie and Literature in the 1950s

研究代表者
 中村 三春 (NAKAMURA MIHARU)
 北海道大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号： 80164341

研究成果の概要（和文）：1950年代における日本映画と日本文学との緊密な関わりについて、原作と映画との間の関係、文学者と映画人との間の協働、アニメーション映画における実践などの分野に亙り、実証的かつ理論的に研究した。映画については溝口健二・豊田四郎・木下恵介・勅使河原宏ら、文学については上田秋成・近松門左衛門・織田作之助・深沢七郎・安部公房ら、アニメーションについては田中喜次・持永只仁・大藤信郎らの仕事を、新たな視点から評価した。

研究成果の概要（英文）：We studied the close correlation between Japanese movie and literature in the 1950s from the viewpoint of relationship of movie and its original, collaboration of author and movie-maker, and its practice in animation. We newly appreciated the movies of MIZOGUCHI, TOYODA, KINOSHITA, TESHIGAWARA, the literary works of AKINARI, CHIKAMATSU, ODA, FUKAZAWA, ABE, and the animations of TANAKA, MOCHINAGA, OFUJI, and so on.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論

1. 研究開始当初の背景

(1) 1950時代、日本文学を題材とした映画監督として、市川崑・五所平之助・豊田四郎・成瀬巳喜男・溝口健二らがあり、その他の監督も多く映画化を手がけた。原作としては、『雨月物語』や近松門左衛門作品などの古典のほか、谷崎潤一郎や林芙美子の現代作品などの多岐に亙っていた。この実態は、各

種日本映画史の記述によって広く知られてはいるものの、その内実、特にその相関性の本質については、日本文学研究はもとより、日本映画史研究においてもきちんと理解されているとはいいがたかった。

(2) この相関の内実を問う従来の研究としては、まず映画の側からは、飯島

正『日本映画史』(1955)、田中純一郎『日本映画発達史』(1957)、塩田長和『日本映画五十年史』(1992)、佐藤忠男『日本映画史』(1995)などの日本映画史があり、また、西田宣善『溝口健二集成』(1991)、スザンネ・シェアマン『成瀬巳喜男』(1997)、佐藤忠男『黒澤明作品解題』(2002)、佐々木徹『木下恵介の世界』(2007)、土屋好生『映画監督市川崑』(2009)などは、個々に日本文学との関わりを論じている。ただし、いずれも1950年代全体を問題として理論的に解明したものではない。

(3) 文学の側からは、個別作家・監督作品間の関連については、ある程度の論考があるが、溝口や黒澤、谷崎・川端等の有名作家に偏っていた。

(4) アニメーション映画においては、1950年代は、商業ルートで日本初長編アニメの『白蛇伝』(1958)が登場、非商業ルートでは日本のアート・アニメ界のパイオニアといわれる大藤信郎が『くじら』(1953)、『幽霊船』(1956、ヴェネチア映画祭特別賞)を制作し、日本アニメの世界進出の出発点となった。この活況において、アニメに題材を提供したのは日本文学、特に日本の古典・児童文学であった。だが、アニメと日本文学との相関の本質的研究は全く未発展の分野である。

2. 研究の目的

黄金時代を迎えていた1950年代の10年間において、今回の調査によって明らかとなったことによれば、2000作に及ぶ日本映画(アニメ数10編以上を含む)が日本文学を原作としていた。1950年代の日本映画は、基本的に日本文学の映画化であったと言っても過言ではない。だが、日本映画研究および日本文学研究において、これまでこのことが正面から総合的に問題とされたことはない。本研究はこれらの日本映画と日本文学の相関、およびその成立・享受の場の様相との解明を、映画・映像分析の手法をも身につけた日本文学研究者間の共同研究として推進しようとするものである。

3. 研究の方法

(1) 作品相互間の関係

日本映画の側からは、映画の題材や物語・舞台設定などを提供した文学と

いう起源を明らかにし、それらの前映画的な要素から映画の要素への発展を分析することにより、監督・脚本家・カメラマン・音楽家その他の制作者の想像力のあり方と、技術的な水準を究明する。また日本文学の側からは、取り上げられた映画による脚色・改変・翻案のあり方の分析により、文芸テキストの特異性、特に通常の読解行為によっては認知困難な特異点を明らかにする。

(2) 映画史的な考察

日本映画史は、戦前期からいわゆる文芸映画を多く生産してきたが、1950年代というこの時期に、日本文学とのこれほど緊密な関係が現出したことについては、妥当な理由づけはなされていない。本研究では、戦中・戦争直後の混乱期を乗り越え、GHQによる映画統制の時代を過ぎ、また東宝争議などの紆余曲折を経験したこの時代に、日本映画が日本文学との相関を緊密にした理由を、映画史的な資料の調査と分析に重点を置いて探究する。

(3) 文化史的な検証

複数の近松作品を題材とする映画が製作されたことから、この時代において、日本の文化伝統の見直しとそれを基とする革新が行われたことは確かである。従来の研究では、例えば溝口の『近松物語』『雨月物語』などの古典に題材をとった作品についての、個別的な考察が多かった。本研究では、個別研究を総合し、日本文学史における伝統の要素と、戦後民主主義社会の到来に伴う現代的な要求とが、いかにこの時代の文芸映画において結晶したのかを追究する。

(4) 実際の研究方法

①1950年代の日本映画における日本文学の表現実態を、東京・関西等の関連資料館等の調査によって網羅的に解明し一覧化する。(国立近代美術館フィルムセンター、早稲田大学演劇博物館、市川市文学プラザ、国立国会図書館、日本近代文学館など)

②これを基礎として、作品間の相関を究明すると同時に、周辺の映画・文学関係資料や同時代言説等を調査・考証し、映画史的における1950年代日本映画と日本文学相関の問題系を整理する。

③この過程で、札幌・東京・京都において順次、研究会を開催し、研究協力者の参加を得て、研究を拡充・精緻化する。

④日本近代全体を展望しつつ、映画と文学との交渉に関わる本質的關係性を解明し、文化史レベルの総合的な研究としてまとめる。

⑤研究成果は公開シンポジウムを開催し、論文を執筆して普及を図り、他の研究者とも共有する。

4. 研究成果

(1) 1950年代日本映画と日本文学との相関の全容を明らかにした

1950年代を含む両者の関連を網羅した基礎的な索引としては、『日本映画原作事典』（日外アソシエーツ、2007）があるが、これは単純な目録である。本研究では、既存の文献資料の徹底調査と各種資料館等の実地調査を通じて、映画・文学各作品の網羅的な解題を備えた資料データベースと年譜を作成した。前述の「2000作」という数字は、この研究によって明らかとなった。

(2) 1950年代日本映画原作と映画との間の関係を理論的に解明した

研究代表者・中村三春は、溝口健二・豊田四郎・木下恵介ら1950年代を代表する監督の作品を、それぞれ上田秋成や近松門左衛門、織田作之助、深沢七郎らの原作との関係において研究した。さらに、言語と映画という異なる媒材の間における変換の原理や、複数の原作あるいは時間的に遡る多数の原作、さらには捏造された原作などの多様な原作現象について、記号学的に理論化し、汎用に足る原作原論を構築した。

(3) 文学者と映画人との間の協働について具体的に解明した

研究分担者（H22→H23）・友田義行は、作家・安部公房と映画監督・勅使河原宏との協働作業について、『砂の女』や『他人の顔』などの著名な代表作を中心として、周辺の芸術家グループとの関わりにも留意して研究を行った。その成果は単著『戦後前衛映画と文学—

安部公房×勅使河原宏』（2012、人文書院、362頁）となって上梓し、この本は2013年度日本比較文学会賞を受賞するなど、学界においても極めて高い評価を受けた。

(4) アニメーション映画と日本文学との相関を研究した

1950年代の日本アニメーション映画の動向は、1980年代以降の世界的な日本アニメの大流行の基礎となった重要な研究対象であるが、従来はほとんど注目されていなかった。研究分担者・米村みゆきは、田中喜次・持永只仁・大藤信郎らのアニメーション作家が、日本神話や日本昔話などの題材を原作として、それをどのようにアニメーション映画として形成したかを分析した。特に、東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵の関連資料に対して初めて詳細な調査を行い、今後の研究者にも利用可能な基礎資料とした。

(5) 多数回にわたる研究会・シンポジウムを開催、多数の研究協力者に研究発表を招請し、研究の充実と普及に努めた

以下のように、3年間に5回の研究会と、1回のシンポジウム（学会企画）を開催し、のべ25件の報告を行い、多数の参加者を得て、研究内容の充実と普及を行った。それらの研究発表の多くは論文化され、さらに研究者間での共有に供することとなった。

①第1回研究会 2011年3月12日（土）
北海道大学東京オフィス

〔研究発表〕

『彼岸花』・『秋日和』成立の背景—「原作：里見弴」の意味するもの— 宮本明子

〔ラウンドテーブル〕

〈原作〉の記号学—『羅生門』『浮雲』『夫婦善哉』など— 中村三春

※他、予定した3題の発表は震災の影響で中止

②第2回研究会 2011年7月30日（土）
北海道大学

〔研究発表〕

鈴木清順の初期映画と1950年代の日活における文芸映画について 井川重乃

第二次世界大戦直後の探偵小説と探偵映画—『獄門島』(1949)を題材に—
横濱 雄二

[ラウンドテーブル]

日本映画と日本文学の相關研究史 友田 義行

俳優化の原理—〈原作〉の記号学2

中村 三春

大藤信郎のアニメーションにみえる神話的想像力 米村 みゆき

③第3回研究会 2011年9月10日(土)

北海道大学東京オフィス

[研究発表]

「文芸映画」について考えるとはいかなることか—ポスト占領期を中心に

溝渕久美子

〈工房〉としての菊池寛 志村三代子

[ラウンドテーブル]

戦後映画運動への一視点—〈シネマ57〉

の顛末— 友田 義行

〈宮沢賢治原作〉とは何か—1950年代の児童向け映像の諸相— 米村 みゆき

テキスト変換の諸相—〈原作〉の記号学3— 中村 三春

④第4回研究会 2012年2月18日(土)

立命館大学

[研究発表]

小説『山宣』と映画『武器なき斗い』における山本宣治像の研究 雨宮 幸明

50年代における「白蛇伝」の受容—漫画映画『白蛇伝』を中心に— 禧美

智章

[ラウンドテーブル]

安部公房作品の「子供」考—ネオリアリズモおよびチャップリンとの比較から— 友田 義行

古典の近代化という問題—〈原作〉の記号学— 中村 三春

“調和”の物語を紡ぐのはなぜか—1950年代短編アニメーションの脚色から探る— 米村 みゆき

⑤第5回研究会 2012年6月23日(土)

北海道大学

[特別研究発表]

『浮雲』における2つの戦後 大久保清朗

[コメンテーター] 阿部 嘉昭

[研究発表]

〈原作〉には刺がある—1950年代日本映画における日本文学— 中村 三春

野間宏他著『文学的映画論』の位置

友田 義行

アニメーション映画における「原作」の効用—1950年代テキストを探るために— 米村 みゆき

⑥シンポジウム(日本近代文学会 2012年度パネル発表)、2012年10月28日

(日) ノートルダム清心女子大学

[基調報告]

〈原作〉の現象学—文学と映画の相關性— 中村 三春

[パネル発表]

文学と映画の〈偶然性〉論—花田清輝・安部公房を基点に— 友田 義行

探偵小説と映画—片岡千恵蔵の金田一耕助— 横濱 雄二

アニメーション映画における〈原作〉

の効用—短編を主軸にして— 米村 みゆき

(6) 研究成果とともに多くの課題が明らかとなり、今後の共同研究への道を開いた

1950年代にのみ限定した相關研究では、その成立の当時から現在に至るまで緊密な関係にあった日本映画と日本文学との実情について、十分に解明できない点が明らかとなった。それに鑑み、研究代表者・研究分担者および研究協力者の中から継続的・発展的な研究に対して強い要望があり、同じ研究代表者により、基盤研究(B)「現代日本映画と日本文学との相關研究—戦後から1970年代までを中心に—」を新たに申請して採択され、今後3年間にわたって研究を推進することとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

①中村 三春、〈原作〉の記号学3—溝口健二『近松物語』と古典の近代化の問題—、層、査読無、6、2013、124-134

②米村 みゆき、想像力のデザイナー—宮崎駿と「原作」、専修大学人文科学研究月報、査読無、261、2013、19-28

③中村 三春、〈原作〉には刺がある—木下恵介監督『檜山節考』を中心として—、季刊iichiko、査読無、117、2012、115-127

- ④米村 みゆき、男女川と羽座衛門、太宰治研究、査読無、20、2012、165-170
- ⑤中村 三春、〈原作〉の記号学—溝口健二監督『雨月物語』の《複数原作》と《遡及原作》—、層、査読無、5、2012、59-69
- ⑥中村 三春、虚構論と〈無限の解釈項〉—文芸理論の更新のために—、季刊iichiko、査読無、109、2011、117-127
- ⑦中村 三春、〈原作〉の記号学—『羅生門』『浮雲』『夫婦善哉』など—、季刊iichiko、査読無、111、2011、115-127
- ⑧友田 義行、研究動向 昭和文学と映画、昭和文学研究、査読無、63、2011、65-68
- ⑨友田 義行、映像のなかの原爆乙女—安部公房／勅使河原宏映画『他人の顔』論—、日本文学、査読有、第60巻第11号、2011、38-50
- ⑩友田 義行、テクノロジーと身体—安部公房のバーチャル・リアリティ、生存学、査読有、4、2011、182-195
- ⑪米村 みゆき、『崖の上のポニョ』の地政学、日語日文学研究（韓国日語日文学会）、査読無、1巻78輯、2011、29-40
- ⑫米村 みゆき、歩行への夢想—『崖の上のポニョ』と『門』『リトル・マーメイド』—、季刊東北学、査読無、25、2010、66-74
- ⑬友田 義行、日本の炭鉱映画史と三池—『三池 終わらない炭鉱の物語』への応答、立命館言語文化研究、査読無、22-2、2010、21-37
- ⑭友田 義行、ドキュメンタリー作家としての勅使河原宏—偶然性という作法—、日本映画は生きている、査読無、7、2010、71-94

〔学会発表〕（計20件）

- ①米村 みゆき、日本文学研究におけるアニメーション研究の状況について、日本アニメーション学会理論研究部会第6回ラウンドテーブル、2013年2月9日、東京造形大学大学院渋谷サテライト教室（東京都）
- ②中村 三春、〈原作〉の現象学—文学と映画の相関性—、2012年度日本近代文学会秋季大会、2012年10月28日、ノートルダム清心女子大学伊福町キャンパス（岡山市）
- ③米村 みゆき、アニメーション映画

における〈原作〉の効用—短編を主軸にして—、2012年度日本近代文学会秋季大会、2012年10月28日、ノートルダム清心女子大学伊福町キャンパス

- ④中村 三春、〈原作〉には刺がある—1950年代日本映画における日本文学—、第5回1950年代日本〈映画-文学〉相関研究会、2012年6月23日、北海道大学（札幌市）
- ⑤米村 みゆき、アニメーション映画における「原作」の効用—1950年代テキストを探るために—、第5回1950年代日本〈映画-文学〉相関研究会、2012年6月23日、北海道大学（札幌市）
- ⑥中村 三春、古典の近代化の問題—〈原作〉の記号学—、第4回 1950年代日本〈映画-文学〉相関研究会、2012年2月18日、立命館大学（京都市）
- ⑦友田 義行、安部公房作品の「子供」考—ネオリアリズモおよびチャップリンとの比較から—、第4回 1950年代日本〈映画-文学〉相関研究会、2012年2月18日、立命館大学（京都市）
- ⑧米村 みゆき、「調和」の物語を紡ぐのはなぜか—1950年代短編アニメーションの脚色から探る—、第4回 1950年代日本〈映画-文学〉相関研究会、2012年2月18日、立命館大学（京都市）
- ⑨米村 みゆき、想像力のデザイン—ジブリ・アニメと「原作」、国際シンポジウム 災難・ネーション・映像—東アジア トランスナショナル・モダニティー、2011年12月11日、国立政治大学（台湾）
- ⑩中村 三春、1950年代日本文芸映画における身体、国際シンポジウム 文化における身体（招待講演）、2011年11月19日、輔仁大学（台湾）
- ⑪友田 義行、安部公房文学室からの展望、占領開拓期文化研究会、2011年9月25日、立命館大学（京都市）
- ⑫中村 三春、テキスト変換の諸相—〈原作〉の記号学3—、第3回 1950年代日本〈映画-文学〉相関研究会、2011年9月10日、北海道大学東京オフィス（東京都）
- ⑬友田 義行、戦後映画運動への一視点—〈シネマ57〉の顛末—、第3回 1950年代日本〈映画-文学〉相関研究会、2011年9月10日、北海道大学東京オフィス（東京都）
- ⑭米村 みゆき、〈宮沢賢治原作〉とは何か—1950年代の児童向け映像の諸相—、第3回 1950年代日本〈映画-文学〉相関研究会、2011年9月10日、北海道大

学東京オフィス（東京都）

⑮米村 みゆき、『赤毛のアン』と日本の想像力、世界日本語教育研究大会（日本語教育学会）、2011年8月20日、天津外国語大学（中国）

⑯友田 義行、日本映画と日本文学の関連研究史、第2回 1950年代日本〈映画－文学〉関連研究会、2011年7月30日、北海道大学（札幌市）

⑰米村 みゆき、大藤信郎のアニメーションにみえる神話的想像力、第2回 1950年代日本〈映画－文学〉関連研究会、2011年7月30日、北海道大学（札幌市）

⑱米村 みゆき、『崖の上のポニョ』の地政学、韓国日語日文学会 春季国際学術学会（招待講演）、2011年4月16日、江原大学校（韓国・春川市）

⑲友田 義行、クリストファー・ボルトンへの応答と安部公房研究の現状、国際安部公房ワークショップ、2011年3月7日、末川記念会館（京都市）

⑳中村 三春、〈原作〉の記号学—『羅生門』『浮雲』『夫婦善哉』など—、第1回 1950年代日本〈映画－文学〉関連研究会、2011年2月14日、北海道大学東京オフィス

〔図書〕（計2件）

①友田 義行、人文書院、戦後前衛映画と文学—安部公房×勅使河原宏、2012、362

②中村 三春、ひつじ書房、〈変異する〉日本現代小説、2013、374

〔その他〕

ホームページ等

1950年代日本〈映画-文学〉関連研究会案内（第1回～第5回）・発表要旨を含む

<http://yaplog.jp/projectmannex/archive/187>

<http://yaplog.jp/projectmannex/archive/190>

<http://yaplog.jp/projectmannex/archive/191>

<http://yaplog.jp/projectmannex/archive/194>

<http://yaplog.jp/projectmannex/archive/196>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 三春（NAKAMURA MIHARU）

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80164341

(2) 研究分担者

米村 みゆき（YONEMURA MIYUKI）

専修大学・文学部・准教授

研究者番号：80351758

友田 義行（TOMODA YOSHIYUKI）

信州大学・教育学部・助教

研究者番号：40516803

（H22→H23研究分担者）